秋田大学教育文化学部附属小学校　校　報

はとの子だより

No.５　令和４年７月２２日（金）発行

学校教育目標　　自律　　のびのび　きびきび　わくわく

過去に学び、未来を変えるための旅　６年修学旅行

６月３０日（木）から７月１日（金）の１泊２日で、６年生の修学旅行を実施しました。

出発前日には、校長先生から、ご自身が研究対象としている田沢湖のクニマスと地域の人々との関わりについてご講義をいただきました。クニマスが湖から消えた理由と戦争、生活の安定と生態系の維持の難しい二者択一など、子どもたちを取り巻く現在の社会情勢とも重なるお話を聞かせていただくことができました。

「過去は変えられないが、未来は変えられる」校長先生が結びでおっしゃられたこの言葉が、６年生の子どもたちの心に深く根ざしてくれることを祈りました。

翌日からの修学旅行では、そんな祈りが通じたかのように、最高学年として未来に期待を抱かせてくれる姿を随所に見せてくれました。

横手市増田のまんが美術館では、世界に誇る日本文化のひとつである漫画に没頭しました。ソーシャルディスタンスに配慮しながら黙読する姿は、コロナ禍で身に付けた美徳の一つでしょうか。（写真左上）

仙北市の工芸体験では、オカリナの色づけや手びねりに挑戦しました。短時間で要領よく作業するために二刀流を取り入れるなど、６年生ならではの創意工夫が光りました。（写真右上）

ホテルでの食事は、夕食も朝食も、完食する子どもたちがたくさんいました。地元の新鮮な食材をふんだんに使った郷土料理が、子どもたちの味覚にも合うように調理されていました。（写真左下）

クニマス資料館では、前々日に校長先生からお話を聞かせていただいたクニマスが、目の前を悠々と泳ぐ姿に感動するとともに、館長さんの熱い語りから持続可能な環境づくりの大切さを改めて実感することができました。館長さんのお子さんは附属小のＯＢとのこと。ご子息の後輩たちに、特に熱いエールを送ってくださったようです。（写真右下）

遊覧船では、湖水の透き通った美しさに喜びつつ、それでもまだウグイなどわずかな種類の生物のみが種を保存できるに過ぎない水質の現実に、複雑な心境をのぞかせていました。（次ページ写真左上）

角館の武家屋敷通りを中心とした自主研修活動では、桜樺細工の職人さんにインタビューする子どもたちの姿に頼もしさを感じました。（写真右上）

武家屋敷の瀟洒（しょうしゃ）なつくりは、現代っ子たちにどのように見えたのか、国語の紀行文の完成を楽しみに待ちたいと思います。（写真左下）

お土産の一番人気は、最近話題のプリンでした。小さな川を飛び越えようとして泥にまみれながらも、プリンだけは死守した猛者もおりました。（写真右下）

附属小の修学旅行といえば、コロナ前は２泊３日の県外で、２日目はほぼ丸一日の自主研修活動というのが定番でした。それが、今年のように１泊２日の県内となると、どうしてもスケールダウンした印象が伴いがちです。しかし、こうして２日間を振り返ってみると、ふるさと秋田のよさを様々な分野で実感できた行程が、来年度以降のオプションとしても十分に魅力的であったように感じました。

バスの中では無言乗車を厳守し、地域の生活を大切にしたマナーのよさも発揮して、ふるさとの過去に学んだ６年生が秋田の未来をどのように変えていくのか、とても楽しみになった修学旅行でした。

変化と継承　紙芝居の授業

旅行から帰ってきてまもなく、６年生は国語の授業で１年生に紙芝居を読んで聞かせていました。

実はこの単元、教科書にはありません。平成 15 年度の公開研究協議会で提示された授業が、年間指導計画に位置付けられ、脈々と実践され続けています。本校には、こうして受け継がれてきた独自の授業が、いくつかの学年に点在しています。

素晴らしいと感じたのは、終了後にその内容をクイズにしたり、１年生に読ませてあげたりするふれあいコーナーのようなものが加わっていたことです。これは、平成１５年度当初はありませんでした。子どもたちの実態に合わせて変化しながら受け継いでいく精神こそ、はとの子にふさわしいと感心しました。

新任の先生　小玉亜紀子先生

６月下旬から、本校に新しい先生が加わりました。

小玉亜紀子先生です。５年部に所属し、３年生と５年生の音楽の授業を担当してくださっています。美しいピアノの音色で、子どもたちの歌声を上手に引き出してくださっています。

２０年に一度の花が咲きました

前号でお知らせした観葉植物のシュフレラに、花が咲きました。

夏季休業明けを予想していましたが、思いの外早く咲きました。２０年に一度の奇跡。夏休みを前に吉兆です。よい夏休みをお過ごしください。